場面別人生訓 こころに響く言葉　1

第１章　新たな決断をするとき
自ら 反（かえり）みて 縮（なお）くんば、千万人と 雖（いえども）吾往かん／孟子
人、遠き 慮（おもんばか）りなければ、必ず近き憂いあり／論語
チャレンジして失敗を恐れるよりも、何もしないことを恐れろ／本田宗一郎
敵を知り 己を知れば 百戦危うからず／孫子
決定は一つの判断である。それはいくつかの選択可能な方法の間の選択を意味する。しかし、それは正しい 決定と間違った決定の間の二者択一であることは稀である。／ピーター・ドラッカー
新しい発想で前例のないことに取り組む／水谷千加古（ＩＮＡＸ元社長）
悲観的になる材料は山ほどある。だが…／アルビン・トフラー （未来学者）
第２章　はじめて部下を持ったとき
やって見せて、言って聞かせて、やらせてみて、ほめてやらねば、 人は動かず／山本五十六
将は 驕（おご）るべからず。驕れば 則（すなわ）ち礼を失う。 礼を失えば則ち人は 離（はな）る。 人離るれば則ち 衆（しゅう）叛（そむ）く。 「将不可驕。驕則失礼。失礼則人離。人離則衆叛」／諸葛亮
盲目的愛情では 人は育たない。厳しい愛情が 人を育てる。／星野仙一 （阪神タイガース前監督）
人間は本来、 仕事の目的と価値がはっきりとわかれば、「仕事をしたがる動物」 である。／西堀栄三郎 （第一次南極越冬隊長）
朝夕の食事は　うまからずとも　ほめて食うべし／伊達政宗
上司の権威をつけるための最良の方法は、部下が困っている仕事を解決してやることである／オノレ・ド・バルザック
人を責むるには　含蓄せんことを要す／呂新吾（儒学者）
第３章　不正を未然に防ぐために
明挙（めいきょ）上達は、王の 垂聴（すいちょう）に在るなり「明挙上達、在王垂聴也」／尉繚子
政事は豆腐の箱の如し。箱が歪めば豆腐も歪む／二宮尊徳

第１章　新たな決断をするとき

自ら 反（かえり）みて 縮（なお）くんば、千万人と 雖（いえども）吾往かん／孟子

コンサルトネット／主宰　角澤　明

禁無断転載

「行く手にどのような困難が待ち受けていようとも、自分が信ずる道を突　き進んでいく」これが創業や新規事業開発において、最も重要なことであり、端的に言えば、『覚悟を決める』ことである。新たなことにチャレンジする時は、皆不安とリスクを抱えている。事業であれば全てを失うかもしれない。

しかし、これが自分のドメイン（生存領域）だと考えて、「この仕事で人生が終わっても悔いはない、これが自分の天命だ」と本気で想えれば、必ず成功する。能力や経験・知識などは、必死に頑張っているうちに自然と身につく。

これは、成功者全員に通じることである。覚悟や信念が曖昧だと、周囲の批判や失敗に心が負けてしまう。心が負けなければ歩みを止めることはなく、やがて花が咲き、実がなるものだ。

人、遠き 慮（おもんばか）りなければ、必ず近き憂いあり／論語

コンサルトネット／主宰　角澤　明

「遠い先のことについて対策を打っておかないと、成さんとすることが足元から崩れていく」

事業開始に当り、直近の資金繰りや行動計画を立てることは必須だが、短期のビジョンだけで事業計画を策定していても、やがて行き詰まることになる。経営理念や長期ビジョンを明確にしておくことが、成否を分けるのだ。

事業計画書は事業開始後のマイルストーンなるとともに、ステイクホルダー（利害関係者）に会社が進もうとしている道を見せるツールになる。

また海外に進出する企業であれば、現地調査をしっかりしておかなければならない。事前調査ができた上で、パートナー企業の調査・選定に入ればよい。
「備えあれば憂いなし」、まさに初めが肝心である。

禁無断転載

敵を知り 己を知れば 百戦危うからず／孫子

(有) 島田教育総合研究所／島田義也

中国・春秋時代の兵法書である「孫子」はクラウゼビッツの「戦争論」と並び、東西の二大戦争書とも呼ばれている。それ以前の中国では、戦争の勝敗は運に左右されるという考え方が強かったのだが、「孫子」の編纂者（孫武といわれている）は戦史研究の結果から、戦争には勝つ理由・負ける理由があり得ることを分析した。

上記の人生訓は「孫子」では「彼（敵）を知り己を知れば百戦危うからず。
彼を知らずして己を知るは一勝一敗す。彼を知らずして己を知らずは戦えば必ず敗れる」と表現されている。新たなビジネスに打って出る時、敵（競合他社）の弱みを知り、そこに己（自社）の強みをぶつけることが勝利を生む。

そして己の強み（「コア・コンピタンス」という）を知り、そこに自信を持つことが迫力と粘り、そして厚みを生むというのは現代も変わらぬ真理である。

決定は一つの判断である。それはいくつかの選択可能な方法の間の選択を意味する。しかし、それは正しい 決定と間違った決定の間の二者択一であることは稀である。／ピーター・ドラッカー

(有) 島田教育総合研究所／島田義也

中国・春秋時代の兵法書である「孫子」はクラウゼビッツの「戦争論」と並び、東西の二大戦争書とも呼ばれている。それ以前の中国では、戦争の勝敗は運に左右されるという考え方が強かったのだが、「孫子」の編纂者（孫武といわれている）は戦史研究の結果から、戦争には勝つ理由・負ける理由があり得ることを分析した。

上記の人生訓は「孫子」では「彼（敵）を知り己を知れば百戦危うからず。
彼を知らずして己を知るは一勝一敗す。彼を知らずして己を知らずは戦えば必ず敗れる」と表現されている。新たなビジネスに打って出る時、敵（競合他社）の弱みを知り、そこに己（自社）の強みをぶつけることが勝利を生む。

禁無断転載